

一休さんの大きな話

あるとき、ひとりの小僧こせうさんが一休さんに、

「この世で、いちばん大きいもんはなんですか」てたずねてん。一休さんは、

「よっしゃ」いうて、こんな話をしはってんて。

「北の海にな、『大たいこう』いう大きな鳥がおったんや。胴どうの大きさが千里、つばさの長さが千里やから、羽広げたら三千里や。

あるとき、大たいこうは、

(いっぺん南極なんきょくいうところを見てみたいなあ)と思うて、南に向かって飛び立ったんや。昨日も飛び、今日も飛び、どこまでもどこまでも、何年も何年も飛びつづけたんやが、いっこうに南極は見えて来いひん。さすがの大たいこうも疲れはてて、海に浮うかんだ木のえだにとまって、羽を休めたんや。そしたら、いきなり下から声がした。

『わしのひげにとまっとるのは何もんや』

大たいこう、びつくりして、

『なんと。わしは、北の海にすむ大たいこういう鳥ですん。いっぺん南極いうところを見てみたいと思うて、はるばる飛んできましたんや。疲れてこのえだにとまって休んだんやが、こんな大木をヒゲやというあなたは、いったいどなたですか』いうてん。そしたら、下から、

『わしは、この南の海そこにすんでおる大えびじや。このわしでも南極なんぞ見たことがない。おまえみたいな小さいもんが行きつけるはずがあらへん、帰れ』て、大声がしてん。大たいこうは、がっかりして帰っていったんや。

さて、大えびは、

『あんな小さい鳥でも、南極を見たいと、はるばる飛んできたんや。わしこそ、見に行かんらん』いうて、南極を指して泳およぎだしよった。昨日も泳ぎ、今日も泳ぎ、どこまでもどこまでも、何年も何年も泳ぎつづけたんやが、いっこうに南極に着かへん。さすがの大えびも疲れはてて、海につき出た岩穴いわあなに入って休んだんや。そしたら、いきなり、空から大声がふってきた。

『わしの耳の穴に入っとんのは、何もんや』

大えび、びつくりして、

『なんと。わしは、南の海にすむ大えびですねん。大こいう鳥が、いっぺん南極を見た  
いと飛んできて、わしのひげにとまりましたんや。それで、わしこそ見にいかならんと  
志こころざしを立てて泳いできましたん。疲れてこの洞穴に入って休んどるんですが、こんな大き  
な洞穴を耳の穴やというあなたは、いったい、どなたですか』いうてん。そしたらな、空  
から、大きな声がひびいてきたんや。

『わしは、この海にすんでおる大亀おおがめじゃ。このわしでも南極なんぞ見たことがない。おま  
えみたくない小さいもんが行きつけるはずがあらへん、帰れ』  
大えび、しょんぼりして帰っていったんや。

さて、大亀は、

「あんな小さいえびでも、南極を見たいと、はるばる泳いできたんや。わしこそ、見にい  
かならん」いうて、南極を指して泳ぎ出しよったそうやが、いまだに帰ってきとらんの  
やて。

「どうや、世界で大きいやろう」